

トモエ化成生誕 90 周年

～歴史の重みを生産現場に生かすと共に、組合活動の更なる強化を図り、拡販につなげよう

去る5/20～21、東京ガーデンパレスにてトモエ肥連第55期通常総会・全国拡販推進会議が開催され、事業方針が決まった。当連合会は日本GAP協会の正会員となり、今後全国規模で広がっていくであろうJGAP農場との連携強化を図り、エムシー・ファートコム社の支援・協力を得て、トモエ銘柄・ときわ製品の販路拡大を目指していく。



記念講演は初日、日本GAP協会武田専務理事より、『最新の農場管理手法 G A P』について講演がなされ、翌日は、東京大学大学院農学生命科学研究科 本間正義教授より『日本農業の可能性と農政改革』と題した講演が行われ、日本農業が如何に世界と向き合っていくかを考えなければならないかと。そして、100haの農場を1万育成し、21世紀型食料基地を構築せよと、農業復活への提言をされ非常に中身の濃い研修会となった。

日本農業の維持発展には、農業の体質強化と国民的視座が必要

本間教授は、もう輸入障壁では国内農業は守れない。国内農業の体質強化が必要と。日本農業は、重要品目を国際市場から隔離することで国内生産の振興を図り農家を守ろうとしてきたが、WTOの農業交渉に見られるように、農業貿易の障壁は大幅に削減される方向にあり、この流れは変わらない。日本農業も国際市場を舞台に展開する必要があると。

(次ページへ続く)

遠めがね

農商工連携の普及で大活躍の(株)びいと六十 社長斉藤温文様の人脈には驚かされる。農業と地域の再生を目的とした農商工連携は、地域の中小企業者が農業生産者と協業して、農産物の加工に新たなアイデアを組み入れて新商品を生み出すが、最大の課題は小ロットのマーケティングと云われている。この課題を解消するために、斉藤様は私財を投じ「地域資源の会」を定期的に催している。毎回、農業生産者、中小企業者に加え中小企業庁、埼玉県庁からの参加もあり、新たなビジネスモデルに向けた熱い意見交換がなされる。農業現場からの新たな発見にも熱心で、5/30には埼玉県の畜産業視察が催された。平成20年度埼玉県生乳品質共励会で最優秀賞を授与された高田牧場は耕畜連携に取り組んでいるが、周辺住民、企業から問題視された牛糞堆肥の臭いの解消に新たなシステムを導入した。定家埼玉大学名誉教授が開発した低曝気活性汚泥法は、家畜糞尿を2週間低曝気した上澄みを家畜糞尿に散布する低コストの消臭システムであるが、高田農場と堆肥センターでは牛糞の臭いが殆ど無く消臭効果の高さを証明している。堆肥活用への新風として期待が膨らむ。高田農場視察を終え、次は(株)サイボクハムを訪れ笹崎龍雄会長との意見交換だ。同社は昭和21年に創業し、種豚の育種改良に中心をおく牧場としてスタートしたが、今や自社牧場産の原料を使ったハム・ソーセージの加工、販売部門、パン工房、レストランまでを有する“完全一貫経営”を特徴としている。さらに、牧場から出る堆肥を有効に活用、地域の農家と提携し地場産野菜の直売を行っている。92歳と思えぬ笹崎会長に、楽農文化の極意を学んだ。斉藤社長は、7/2、3の両日開催される全肥商連全国研修会(新潟市)でも農商工連携成功の秘訣をお話されるが、農業現場を活動拠点とされているだけに、どのような話になるか興味津々である。

農業は衰退産業ではなく、地域経済の中心として工業や商業と連携を深め、活性化する必要がある。日本の農業者の多くは、技術的にも能力的にも優秀であるが、問題はそれを生かす機会が限られていることだ。日本農業を再生するには、農業者に意欲を持たず政策展開をするべき。先ず減反政策の廃止が第一歩、全国一律の農政ではなく、経済特区を設けインフラ整備を行い、大規模に農地の集積を行い21世紀型のより高度な技術体系による生産システムを導入した『食料基地』を構築する。農家への直接支払いは、規模拡大を実現してからで良い。ただ、日本の農業を考える場合、農業は多様な魅力を持つ産業で、多面的機能の観点から小規模兼業稲作農家の維持が望ましい地域もある。地域の農業・環境資源の維持管理を条件に、多様な農業の価値を定年退職者や納税・寄付制度の活用で維持するなど、いずれにしても農業の維持発展は国民的視座が必要。



集落営農組合のJGAP認証取得挑戦

昨年収穫祭の時、初めてJGAPを知った滋賀県の下二俣町営農組合のメンバー。JGAP指導員である園田商店の村川課長の指導で、今までの農業を工程管理の手法で見直すきっかけとなった。ほとんどのメンバーは未だ現役のサラリーマンで、米作中心に約30haの週末農業者である。最近、農事組合法人“百笑倶楽部”を立ち上げた。会社勤めで学んだISOの手法で農業経営を見直し、農業管理マニュアルを作成した。



しかし、売買契約書、農地の賃貸借契約書、借地の農薬履歴の把握、雇用契約書、残留農薬の分析、ドリフトのリスク検討、農薬保管庫の改善、周辺の環境への配慮、農薬散布機の洗浄液の処理、農業日誌の改善、施設内の整理整頓、ファイルの整理法など、多くの是正・改善を指摘された。しかし、秋の収穫迄にJGAP認証取得を目指し、今月末5名がJGAP指導員研修を受講する。やる気満々のアラ還(アラウンド還暦)メンバーである。



猛暑の駅伝大会 ~ 初の3チーム出場

駅伝同好会MAC'S(マックス)です。5月初旬、夏日のとある日曜日に行なわれた恒例の駅伝大会をレポートします。昨年は雨にたたられた大会でしたが、今年は正反対の晴天。立っただけで汗が噴きだす強い日差しの中、一本の襷に想いを込めたランナー達が一斉にスタートしました。23kmを4区間で競う大会ですが、東京マラソンの盛上りを彷彿させるかのように、昨年よりも270チーム多い1,727チームが参加し、MAC'Sもチーム史上初の3チームが出場しました。それもこれも8名の助っ人さんのおかげです。本当に有難うございました。



さて結果ですが、暑さにめげながらも3チーム無事に完走。精鋭チームは1時間57分59秒でクラス順位425位(1,074チーム中)の好成績、マイペースチームは2時間16分12秒と2時間33分28秒でクラス順位559位と587位(590チーム中)でした。熱中症で運ばれる選手が多数いた中で、12名全員が襷をつなぎ無事にゴールできたことがなによりでした。ビールと焼肉で恒例の打上げ、日焼けした体を冷やすのには一番の薬になりました。(MAC'S主将 東京支店 高橋)

前列左より：稲子さん(日カバ)、渡辺(MAC)、井上さん(ラサ)、細矢さん(MCFC) 後列左より：安場さん(MCFC)、三井さん(MCFC)、高橋(MAC)、桑原(MAC)、水島さん(三菱商事)、梶川さん、新夕さん(日カバ)

いよいよ東海地方まで梅雨入りしました。例年に比べると、どの地域も梅雨入りが数日遅れています。一般的に梅雨明けが遅れた年は冷夏となる場合も多く、冷害が発生しやすい傾向にあるので気になるところですね。

編集局長：小田原次洋 アシスタント：助川尚子

電話：03-5802-2011/E-mail：journal@mcagri.co.jp URL http://www.mcagri.jp